

八〇年代初頭、アメリカの未来学者アルビン・トフラーが出版した『ザ・サード・ウェーブ』は当時の社会で話題になった書物である。農業社会、工業社会を経由して、先進諸国は情報社会に移行することを逸早く予見し、その社会に登場する様々な現象を予測したものであるが、相当部分が予測のように実現してきた。

そのひとつがプロシューマの登場である。供給する立場（プロデューサー）と消費する立場（コンシューマー）の境界が曖昧になり、一人で両者の役割をする人間が増加するという意味であるが、現在の社会には様々なプロシューマーが存在している。些細な事例であるが、最近、自作の名刺を手渡される機会が増加している。素人でもコンピュータの画面の指示のように操作すれば名刺のデザインができるソフトウェアの恩恵である。

一〇〇万区画以上もあるドイツのクラインガルテン（市民農園）ほどではないが、日本でも週末農業が流行している。元来、一九世紀のドイツで失業対策として考案された事業であったが、現在の日本では裕福な階層の趣味になっている。日曜大工も増加しており、郊外のDIY（ドゥ・イット・ヨアセルフ）の大型店舗は繁盛している。これも必要な家具などを制作するというよりは趣味の領域であり、プロシューマーの一種である。

それ以外にも境界が曖昧になっている現象は多数ある。最近のゴルフの試合では、高等学校の生徒などがアマチュアの選手がプロゴルファーと対等の勝負をする場合も増加しているし、小説でも主婦などの素人が著名な文学賞受賞者になる事例が増大している。これらは素人（アマチュア）と玄人（プロフェッショナル）の境界が曖昧になった現象として、アマフェッショナルと命名することができる。

最近、各地で地域の住民が道路や公園の清掃をする活動が増加している。アダプト・プログラムといわれ、住民が公共施設を養子にして育成するという趣旨である。このような維持管理作業は普通には仕事であるが、参加している人々にとっては一種の余暇活動にもなっている。トフラーの流儀で命名すれば、仕事（ワーク）と余暇（リクリエーション）の境界が消滅したワークリエーションということになる。

このような境界の消滅が次々に発生している背景には、名刺を簡単にデザインできる情報技術の進歩や、それほどの訓練なく工作のできる工作機械の進歩などもあるが、最大の原因は自由時間の増大である。平均寿命が延長したことにより、我々の生涯の自由時間は約一二万時間になるが、これは戦前では四万四〇〇〇時間、戦後になっても五万八〇〇〇時間程度であったから、膨大な時間を自由に利用できる時代になったのである。

これはNPOやNGOの活動にも反映している。平成一〇年末に成立した特定非営利活動推進法で認定された団体は翌年にはわずかに二三であったが、それ以後の七年で一七七〇〇以上に急増している。世界のNGOも九〇年頃には六〇〇〇程度であったが、一〇年間で二万六〇〇〇に増加している。それは多数の人々が自由になった時間を社会の維持のために使用しているということである。

最近の環境問題の会議などでは、NPOやNGOの意見が重視されるだけでなく、それらの参加なくしては会議が成立しない状況になっている。今後も増大していくであろう自由時間は従来の社会に存在していた境界を次々と打破していく。その自由時間をどのように行使するかが世界の行方を左右する時代が到来しているのである。